

2016年3月15日、アーティスト西浦喜八郎氏をゲストに「多元的共生社会における日本文化を考える」をテーマに青山学院大学苅宿教授とのトークショーが開催されました。



Nishiura Style で人気を博しているアーティスト西浦喜八郎氏の魅力の原点は何か。今回のトークショーでは、「自分にはない何かを持っている」と、ご自身でも西浦氏に大変興味をお持ちの苅宿先生が様々な角度から質問、2時間に亘る会話の中でその魅力を紐解いていきました。

まず、お茶、お香、お花など日本文化を提唱されている一方、地球物理学者でもある西浦氏にその経緯を伺いました。そもそもアートへのきっかけは、アートから逃げることから始まったといいます。

明治期、西浦焼の窯元として財閥的發展をしてきた西浦家に生まれ、幼いころから美術品に囲まれて育った喜八郎氏は父から週3日は美術館に連れ回され「この作品は良い。これは悪いから見るな」と言われ続け、自分の中でアートは嫌なものになってしまったという。その結果アートから逃げる意味もあって地球物理学を学びにアメリカに渡りました。

しばらくして、アメリカ滞在の寂しさから前向きな気持ちが失われている頃、日本の友人から送られてきた絵葉書の「月光菩薩」が目にとまりました。眺めていると「この菩薩は1000年もの間、暗い中にいる時も、老若男女いかなる人に対しても微笑みを与え続けているんだと感じ、涙が溢れてきました。その時初めてアートの持つ力を感じ、西浦家のアートに携わる道も悪くないと思ったのです」と当時を振り返って話されました。

また、日本文化を教えるきっかけになったのはどの質問には

「お付き合いのあった花屋さんから、子供に教えてと頼まれたのが始まりで、その後は自然な流れでお茶やお香、書にも広がっていきました。うちは『道』をつけていないので流派を越えて親も参加できます」と強調されました。「大き

な流派は決まりごとが多く、素人がすぐ楽しめる段階には行かないんです。うちは実践あるのみで、子供も外国人も楽しめるのです」との話に、苜宿先生が「流れがみんな向こうからやってくるんですね。他力本願ではないですけど、目の前に現れることを受け止め受容する力、それが人に役立つ形で現れるんだろうと感じます」と、西浦氏の持つ自然体の魅力について触れました。

そして、「そういう生き方をするコツは？」の投げかけには

「自然と一体になることで見えるものがあるからなんです。スマトラ沖大地震の津波で人間は何万人も逃げ遅れて亡くなったけど、象は高台に逃げて生き延びました。自然の一部になることで磨かれる感覚とかアンテナのようなものはあるかもしれませんね」と、まさに西浦氏の生き方の本質に迫る、言い得て妙なお答えをいただきました。

最後に生涯学習開発財団とも関わりのある異文化交流については

「相手がどこの国の人かは意識しません。例えば月を見て美しいと感じる共通点を重視します。子供は正直ですからつまらないとすぐ態度に出ます。この子たちに楽しんでもらうことができれば、もう誰とでもコミュニケーションが取れるんだと思います」と語っていただきました。

締めに苜宿先生から「効率よく生きることに関われがちな一般人に対し、対照的な生き方をしている西浦さん、多くの方の生きるヒントになったのではないでしょう」と感想をいただき、無事トークショーが終了しました。